

新緑まぶしい天城の山を歩く

天候不順の春とは言え、今年の天気の流れ方は異常だった。夏のような高温の中、子供たちが水遊びに興ずる映像がテレビで放映される一方で、日本列島の別の地域では大雪で交通が乱れたり、被害が続出したりで、異常気象に驚かされることが何回も起きた。

そんな中、天気予報を横目でにらみながら、4月7日～8日、健生会友の会山歩きクラブの例会で伊豆半島の達磨山、天城山に登った。参加者21名。内 女性15名。

三保の松原と富士山

早朝6時半前に大和高田市の土庫病院ふれあい前を出発したバスは、名阪、東名阪、伊勢湾岸そして新東名と順調に走って、11時には静岡県の三保の松原に着いた。三大松原の一つとされ、広重の浮世絵にも描かれたこの松原も、衰え始めたと聞いていたが、富士山をバックした広大な砂浜と数万本の松の林はやはり日本の典型的な景勝であると思った。残念ながら曇りがちの空の下で、富士の姿が不鮮明だったし、強い風が砂を巻き上げていて落ちていて景色と昼食とを楽しむ雰囲気ではなかった。



↑マツグミ (ツルのように松の木に絡んでいた)

初めて見たマツグミ

ここで松に寄生する「マツグミ (松菜黄)」という植物を初めてみた。ヤドリギ科マツグミ属のこの植物はマツヤツガ、モミなどの針葉樹に寄生する寄生木なのだ。

新緑輝く伊豆の山々

早々に昼食を済ませて、バスはさらに東進、沼津ICから伊豆半島に入った。折よく太陽が顔を見せ始めたこともあって、伊豆の山々は眩しいばかりの新緑を纏っていた。そしてその新緑に桜、アセビ、シャクナゲなどがいろどりを添え、沿道の家々の庭ではミツマタやサクラソウ、レンギョウなどが春を謳歌していた。中でも小さい白い花を密につけたマメザクラがあちこちで枝いっぱい咲き誇り、時々吹く強い風がその花びらを宙に舞い散らしていた。

西伊豆スカイラインの戸田(へだ)峠近くの駐車場から登った達磨(だるま)山からは、富士の全景が見えたが、雲が邪魔をして、折角の富士山ビューポイントらしい景観は得られなかった。



宿舎の園庭にクマガイソウの群れ

宿舎の「国民宿舎井原の庄」はよく手入れされた一万坪の敷地に各戸独立の別荘風客室が点在する造りになっている。新緑の山を借景に、椿や桜、そして春の花々が咲いていて、“緑と花の中の宿”の感じが好ましい。

その庭園の一角にクマガイソウの群落が蕾を解こうとしていた。源平合戦で活躍した武者・熊谷直実の母衣(ほろ)に見立てた、独特の花はまだ見られなかったが、植木ばさみで切り揃えたような扇形の特徴ある

葉はよく目立っていた。

霜柱立つ登山道を天城山に

翌8日快晴、宿を4時半に出発、登山口から天城山登山を開始。5cmもの霜柱を踏みつつ登る。

高度を上げると、落葉樹の芽生えは未だで、木の間越しに富士山が見られる。冠雪の富士が紺碧の空に屹立する姿は圧巻。歓声をあげ、ため息交じりに見惚れながら、6:25万二郎岳に、さらにアセビのトンネルを抜けて7:55



万三郎岳（ばんざぶろう 1406m・天城最高峰）に登頂。

全員よく歩きました

ここで膝に不安を抱える私は5名の女性と共に、シャクナゲコースと呼ばれる別路を辿って登山口に戻ったが、この道も結構な険路だった、一方縦走路完走組も路線バスの時刻に間に合わそうと最後は走ったらしい。

全員よく歩きました。春の陽を浴び、新緑・花・富士を楽しんだ、心地よい山旅でした。



←万三郎岳山頂での一行

続・二上山に咲く花々 49

ママコノシリヌグイ（継子の尻拭い）

タデ科イヌタデ属

写真は 澤木仁 さん

湿り気のある明るい場所に自生。花期は5~10月と長く、白とピンクの花は可愛らしい。三角形の葉と角（稜）のある茎が特徴ですが、そこに鋭いトゲがはえており、それが痛いのでこの名になったとのこと。それにしてもひどい名前ですね。現代の社会状況に照らしても問題ありで、植物学会が勇断を下して、和名を変更すべきだと思いますね。

